

大学生のキャリア選択を困難にする認知的要因

Cognitive Factors that Make Career Choice Difficult
in University Students

小柴 薫 (Kaoru Koshiba) 指導：根建 金男

問題・目的

大学生にとって卒業後の進路を決めることは重大なライフ・イベントであり、それだけに意思決定がなかなかできないという、進路未決定の悩みを持つ者は多い(若松, 2012)。したがって、キャリア選択を支援する取り組みとして、2004年よりキャリア教育が開始された。現在は、教育プログラムの立案や検討(江利川, 2012)、就職活動方針の研究(小菅, 2014)など、教育的立場からの研究が多く報告されている。一方、心理学の立場からは自己効力感(山口, 2015)や積極的姿勢(安達, 2004)の検討がされている。しかしながら、積極的姿勢(コミットメント)が進路意思決定を困難にする(小柴他, 2016)と相反する研究結果も出ている。キャリア選択とコミットメントの関連性で影響する要因は不明確である。したがって、本研究ではキャリア選択を困難にする認知的要因を明らかにすることを目的とした。

研究1

目的：キャリア選択を困難にする認知的要因を質的に検討することを目的とした。

方法：私立大学の4年生以上を対象に教場での一斉法または機縁法の質問紙調査を実施し、個別面接参加者のスクリーニング調査を行った。うち条件を満たすコミットメント高群9名に対して60分程度の半構造化面接を実施した。面接ではキャリア選択における困難感、自己イメージを確認した。本研究ではGTAを用いて分析した。

分析：戈木(2005)のGTAを用いた。

結果：コミットメントの高い大学生は、進路選択時にやりたいこと探しなど、困難に感じる要因に対して援助希求や対処行動などを行い、困難感を低減させて意思決定を行っていることが示唆された。また、時間と共に困難感を低減させ、意思決定を行っていることも示された。困難に感じる要因に対してネガティブな自己イメージが生じた場合は、自ら対処を行い、ネガティブな自己イメージも悪いことではないと肯定的に捉えていることが推察された。

研究2

目的：研究1で明らかになった仮説を量的分析で実証的に検討することを目的とした。

仮説：コミットメント傾向の高さは、1. やりたいこと探しの動機づけに正の影響を与える2. 援助希求、対処行動、時間に正の影響を与える3. 意思決定の困難さに負の影響を与える4. ネガティブな自己イメージの肯定に正の影響を与える5. 援助希求、対処行動、時間は、意思決定の困難さに負の影響を与える6. やりたいこと探しの動機づけは、意思決定の困難さに負の影響を与える7. 進路意思決定の困難さは自己肯定感に負の影響を与える

方法：大学生147名(男性52名、女性95名、平均年齢21.34, SD=0.98)を対象として、27項目ハーディネス尺度下位尺度コミットメント(森他, 2005)、やりたいこと探しの動機(荻野他, 2008)、大学生版自己肯定感(吉森, 2015)、進路意思決定の困難さ(若松, 2001)、コーピング尺度の下位尺度、回避・逃避型(尾関, 1993)、GCQ特性版の下位尺度、情緒的サポート希求・問題解決(佐々木他, 2002)を用いて質問紙調査を行った。

結果と考察：相関分析の結果、コミットメントと援助希求、問題解決、やりたいこと探しと進路意思決定の困難さ、援助希求、自己肯定感と進路意思決定の困難さに相関がみられた。影響を検討するためパス解析を実施した。結果をFigure 1に示す。

総合考察

本論文の結果から、キャリア選択を困難にする認知的要因として、やりたいこと探しの動機づけが示唆された。動機づけは目標に向かって行動するためには重要な概念であるが、目標が明確すぎると視野が狭くなり、逆に進路意思決定が困難になるものと考えられる。

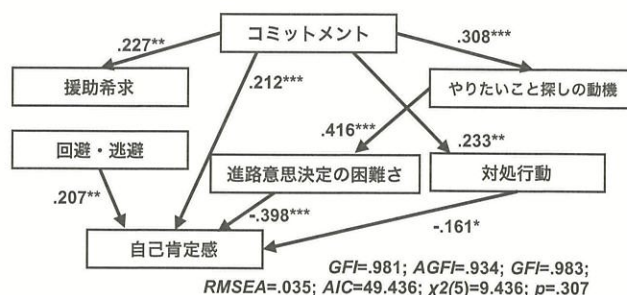


Figure 1 パス解析の結果(有意のパスのみ記載)